

歴史は未来の羅針盤



これまでに刊行しました『近江日野の歴史』は、第一巻「自然・古代編」、第二巻「中世編」、第五巻「文化財編」、第六巻「民俗編」、第七巻「日野商人編」、第八巻「史料編」となりました。教育委員会や各公民館などにおいて、一冊四、〇〇〇円で好評販売中ですので、ぜひともお買い求めください。

『近江日野の歴史』第七巻「日野商人編」を発売して以来、日野商人の活動の様子をさまざまな視点から紹介しています。今回は、日野商人の社会貢献について紹介します。

日野商人と社会貢献

日野商人は、商業活動で得た利益を、積極的に社会へと還元していました。こうした活動は、本宅のある日野地域はもちろん、出店先においても行われていました。

日野商人が行った社会貢献はさまざまです。飢饉や凶作・火事などの災害時には施米や生活用品の提供などを行い、檀那寺や地域にある寺社に対しては、造営費や修繕費などを寄付、石灯籠や仏具などを寄進しました。また、明治期以降では道路や学校、病院建設など公共事業に対して多額の寄付を行うなど、その活動は多岐にわたっています。

ではなぜ日野商人たちはこぞつて社会貢献活動を行ったのでしょうか。それは、日野商人のあいだに、商売で得た利益を守銭奴のごとく蓄えるのではなく、地域のために使つてこそ、社会も幸福になり、家業の長久にもつながるという「陰徳善事」の精神が共有されていたからにはかなりません。

『近江日野の歴史』第七巻「日野商人編」では、各商家それぞれの社会貢献について紹介していますが、ここでは、その一例として高井作右衛門家の社会貢献について紹介します。

高井家の社会貢献

高井作右衛門家は、大字松尾出身で、上野国緑野郡藤岡町（群馬県藤岡市）に本店を構え、同国高崎町（群馬県高崎市）や伊勢国津（三重県津市）などにおいて、酒造業や質屋業を営んだ商家です。現在でも、高井株式会社として酒

造業を営んでおられます。この高井家も、他の日野商人と同じく多くの社会貢献を行つていきます。

高井家に残されている史料によると、出店のある藤岡町は、明和八（一七七二）年、寛政六（一七九四）年、文化十一（一八一四）年など、幾度となく火災に見舞われました。そのような際、高井家は、御飯・沢庵などの食料をはじめ、水溜・傘・箒・蠟燭などの生活用品、材木などの復旧支援品の提供を行いました。さらに、天保飢饉の際には、金銭・白米を提供、慶応三（一八六七）年六月、米価が高騰した際には、困窮民に対して白米を支給するなどの窮民救済活動を行いました。

本宅のある日野においても高井家は社会貢献を行っています。なかでも開店七世の作右衛門昌言（愛蓮）は、明治九（一八七六）年に松尾町の戸長に就任したのをはじめ、第六代・第八代の日野町

長などの公職を歴任する傍ら、公共事業やインフラ整備に尽力しています。明治二十四年には、大字松尾里道修繕費、同二十五年の県下窮民救済費、同三十七年の大本赤十字社事業費、同四十一年の日野尋常高等小学校地移転に伴う学校新築費など、多方面に寄付を行いました。また、高井家は、菩提寺でもある松尾の正明寺に対しても特別の畏敬を払い、数々の寄付を行つていきます。明治二十七年、正明寺が火災にあつた際には、高井家が中心となってその再興に尽力し、同四十四年には基本財産のために寄付をしています。



▲正明寺 山門